Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュ等が誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第2回

Jensen
（ジャンセン）

Jensen社は1929年にスピーカーの専門メーカーとしてデンマーク出身のピーター・ジェンセンによってシカゴに設立。その卓越したスピーカー製作技術の高さでウエスタンエレクトリック社にも数々のユニットを納めていた。劇場用、家庭用のスピーカーの他にフェンダー等のギターアンプのスピーカーやハモンドオルガンなどの楽器用にも多く使用されている。音の特徴としてはドライバー、トゥイーターのダイアフラムが薄いフェノリック樹脂で形成されているため、声やピアノの音もナチュラルでありながら弦楽器はツヤのある音を奏でる。38cmウーファーは大型のマグネットに軽く張りのあるコーン紙が使われていることで、他のシステムをしのぐ反応の速い低音再生が可能になり、Jazz、Classic、POPSとジャンルを選ばずに対応する。当時、同社の製品は本拠地がアメリカ東海岸であったため日本にはあまり輸入されなかったようだ。

本文／**田中伊佐資**
キャプション／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）　撮影／田代法生

インペリアル
「PR-100」

1954年製、当社のプレステージモデルで大型バックロードホーンキャビネットに38cmウーファー、ホーンドライバー、トゥイーターを搭載した3ウェイシステムで、ごくわずかしか日本に輸入されていない。本機の特徴としては、ウエスタン型のフォールデッドホーンキャビネットの上部低音開口部分にホーンドライバーとトゥイーターをセットすることで、大型システムにもかかわらず音のフォーカスがぼけることなくピンポイント再生。低音の反応も速く、レンジの広い音は2ウェイシステムのオートグラフ、ハーツフィールドでも難しいほどリアルでスケールの大きな再生音を実現する。これは、日本で良く知られるG610同軸ユニットを搭載されたモデルでは再現できない音だろう。市場価格350万円ペア

音楽性を重視するなら東海岸のメーカーがいい！ワイドレンジかつ、ほのかな気品が味わえる

前回、すなわち第1回の記事について、私はこう思った。

「こりゃ、オレの出る幕ではないわ」。

写真がきれい、そして岡田さんの説明が丁寧。これでは本文は要らない。編集者にそのことを告げたら、ビンテージ・ビギナーが入りやすいような序章が欲しいとのこと。逆にいえば私は多くを望まれていない。これですっかり気が楽になって、本日もビギナー代表者は、岡田さんに質問するのだった。

「第2回のテーマはジャンセンということですが、これはどうしてなんですか」

「西海岸のJBL、アルテックは、シアター用から始まっているので、セリフ重視の設計なんです。東海岸は音楽性が高いメーカーが多いです。シカゴが発祥地のジャンセンはまさにその代表ですね。また民生用スピーカーだけでなく、50年代以降、ほとんどのギターアンプにユニットを提供しています。つまり当時のギタリストはジャンセンの音を出している。ハモンド・オルガンも同じ。だから相性がいい。またエンクロージャーの作りがとても楽器的です」

すでにジャンセンの最高峰、インペリアルが、目の前にセットしてあった。あって当然のような口ぶりだが、これを探すのは簡単な話ではない。稀少モデルである。物体から得も言われぬオーラを発している。最新機器がどうにもならないのはこのオーラだ。説明は後回しとばかりに、岡田さんは立て続けに音楽をかけた。

最初がヨーヨー・マ。なんともいえない艶というか含蓄がある。響きが玄妙だった。私はクラシックが苦手なので、とっさの感覚的なことしか言えないが、極めてすこやかな気分になった。

次にモーツアルトのピアノ四重奏曲、フォープレイのフュージョン、青江三奈のヴォーカルと続くわけだが、どれもこれもほのかな気品がある。この香りは前回トゥルーソニックにはなかった。またさらにワイドレンジでもある。50年代初頭の製品でありながら3ウェイ。これがジャンセンの肝だと岡田さんは言う。

設計思想が理にかなっている。充実した中域ドライバーを作って、上と下のユニットで補う。コーン紙は極薄でばんばんだった。弾力性がある。いかにも緻密な音が出る感じがした。だがそういうユニットは、低い帯域が苦しい。そこをエンクロージャー（ホーン）がカバーしている。

ジャンセンといえば同軸ユニット。それを入れたものがインペリアルだとばかり思っていた。雑誌でも見たことがある。

「いや違うんですよ。エンクロージャーの上下を逆さにしたものですよね。あれは日本企画です。アメリカでは通用しません」

「ところで岡田さん、ビンテージって壊れやすくないですか。または直しにくいとか」

前回、ビンテージの行く手を阻む壁があると書いた。これがその2にあたる。

「ビンテージ製品は、シンプルに作られているのでそう簡単には壊れませんよ。また補修もしやすいです。ネジ式が多くバラバラにできるから、メンテナンスもしやすい。あとは調整のしかただけです。長い間使っていないと皮膜ができて接触不良になる場合もありますが、簡単に直ります」

マグネットの減磁についても心配ない。アルニコは衝撃に弱いけれど、実際、着磁したスピーカーは店内には一個もない、ということだ。

だいたい、そんな打算的なことを考えるのは、インペリアルに対して失礼だった。なにしろ名称はインペリアル。こちら側があれこれ言う余地はない。スピーカーが使い手を選ぶのだ。

トライプレックス
「TP100」

⬅1949年製。同社が開発したフロア型3ウェイシステムの1号機である。ユニットはPR-100インペリアルとほぼ同じだが、初期のシステムにはウーファーに解像力の高い38cm A-15PM/ST-600が搭載されていて、後期になるとP15LLが搭載されている。リアルで密度の高い再生音が魅力で箱の両サイドにバックロードホーンの開口部があるため、コーナーにセッテイングすると大型システムに負けないスケールを引き出すことができる。市場価格180万円ペア

トライプレックス
「TP200」

➡1954年製。インペリアルPR-100と同時期に生産され、洒落たアールデコ調のデザインでTP100の後継機となる。PR-100と同じユニットが搭載され、箱はウルトラフレックスという構造を採用することで、よりストレートな低音再生が可能となった。こちらも低音の開口部が両サイドにあるのでTP100同様にコーナーでその威力をより発揮する。市場価格130万円ペア

「TP100」に搭載のウーファー
「A-15PM/ST600」（38cm）

ウエスタンエレクトリックの有名で高額なモニタースピーカー753C（ペア500万円以上）に搭載されているウーファーであるJensen製のKS-12004/A-15PMと同等のタイプで、そのリアルな再生音は歴代のアルニコ38cmユニットの中でも群を抜いている

「PR-100」「TP200」に搭載のウーファー
P15LL（38cm）

本機ほど反応が早く厚みのある再生音が可能な38cm ウーファーは他にないかもしれない。Jensenが誇る大型3ウェイシステムの心臓部を支えているユニットである

3モデル共通のホーン&トゥイーター

「RP201」（ミッドレンジホーンドライバー）

中域再生用ドライバーとして有名なウエスタンエレクトリックの555型ドライバーの流れを汲み、ダイアフラムがフェノリック樹脂でほぼ同じ口径形状のタイプが使われている。アルミ製の中域ホーンとのなじみも絶妙で中域音の再現はとても自然でリアルなものとなっている。

「RP302」（ホーントゥイーター）

薄いフェノリック樹脂製のダイアフラムを持ち、その滑らかで良くのびている高域音は当時としてはずば抜けた解像力で他を圧倒していたようだ。60年代後半まで生産され、磁気回路は同じだが、正面のホーンと取り付けアダプターの形状が年代によって多少異なり3～4タイプある。最初期のタイプのみ真鍮製で TP-100に搭載されている。ダイアフラムは薄いフェノリック樹脂で形成されている

取材協力：アトリエJe-te　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com

Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュ等が誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第3回

Jensen

ジェンセンのフルレンジユニット

ジェンセンの同軸ユニットの特徴としてウーファー部分の解像力が非常に高く、38cmタイプでもフルレンジに近い鳴り方をするので、トゥイーターやドライバーとのつながりが非常にいい。また、スタジオモニターやコンシューマーを目的としているので比較的狭いス ペースでも使いやすいユニットである。ほとんどのユニットが反応の速いフィックスドエッジにこだわって作られており、コンデションの良い物は50年以上も経ってもエッジ交換も不要で、この先の数十年以上も使えるものばかりなのは驚かされる。なお、同社からはフルレンジユニットを搭載したメーカーシステムは発売されておらず、これらのユニットをうまく鳴らすコツは薄めの板で作られた響きの良い少し大きめの箱か、バックロードタイプの箱に入れることであろう。

本文／**田中伊佐資**

キャプション／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）　撮影／田代法生

G-600

38cmの3way同軸ユニットでミッドレンジにフェノリックダイアフラムを採用したホーン型ドライバーを搭載。ウーファーとトゥイーターは前号で紹介された最上位機種の PR-100インペリアルと同じものが贅沢に使われているため、コンパクトな同軸ユニットながら上位機種システムの音場がみごとに再現される。このユニットの原型になったのは1950年に開発された日本でも良く知られるG-610ユニットだが、こちらはPAシステムを目的に作られてるため、中高域が強めに設計され、かなり大きな箱が必要となったため、通常の部屋でバランスが取れるように設計されたのがこのG-600ユニットのようだ。1959年から3年間ぐらいしか作られていなため、生産台数も少なく日本でもあまり見かけないが、最近の録音ソースも十分に対応する完成度の高いユニット。市場価格65 ～ 75万円/ペア

ジェンセンの立役者、同軸ユニットが登場 ハイファイ的で心地よいとろみは群を抜く

例によって岡田さんの講義を聞きに「アトリエJe-tee」へ出向いた。

前回で取り上げたジェンセンはまずまずの反響があったという。ジェンセンは15インチの同軸フルレンジユニットがつとに知られている。これをあえて隠し球にしたのがよかったのだろうと思った。なので今回いよいよジェンセンの立役者、同軸ユニットが登場となる。

ユニットがハダカで床に転がっている。ひとつがそのジェンセンの530。50年代前半のもの。もうひとつがもっと新しい、80年代のガウス3588。

ナタリー・コールの『アンフォゲッタブル』をそれぞれから再生してみた。ガウスは鼻づまり声でジェンセンはすらっとしている。かなり違うものだなと思っていたら、岡田さんはトゥイーターをわざと切っていた。その理由はウーファーの高域がどこまで伸びているかということを私に教えたかったためだ。つまり530はウーファー一発だけでもけっこういける。

「ジェンセンの発想は、ウーファーをフルレンジのように目一杯の帯域に使って、足りない高域へちょこんとトゥイーターを加え、低域をエンクロージャーで補うということなんです。複雑なことをしていないから、音が自然でしょ」

次にちゃんとトゥイーターを出してもらうと、さすがにひとかさ上が伸びてナタリーの声がみずみずしくなった。ユニット1個が床にごろりだから、ステレオ感は当然ないし、セッティングもへったくれもない。なのにその声質に引き込まれる。一緒に床に寝そべりたくなった。

530のわきにタイプHという同軸もあった。これは40年代の製造。中央にドライバーが埋め込まれていて、ウーファーのコーン紙をホーンに見立てている。なるほどラッパっぽい。私はボーカルという点ではこっちが好みだった。ミッドレンジが豊かでしなやか。女性ボーカル専用に欲しい逸品だ。530はもっと高域にメリハリがあって音楽の守備範囲が広い。いずれにせよボーカルは点音源に限るとも思った。

最後に登場したユニットが、G600。3ウェイの同軸。ジェンセンのボス。ウーファーとトゥイーターはプレステージモデルのインペリアルで使われている。

「同種のG610が有名ですが、あれはPA用なんです。G600の方がモダンだし、まとまりがいいですね」。

Jeteeのオリジナル・エンクロージャーに入れたその音を聴いた。やはり群を抜いている。その声はあまりにも官能的。雰囲気を変えて、オスカー・ピーターソンをかけてみたところ、おそろしくハイファイ的でもあった。しかも心地よいとろみがある。このとろみこそ、スペックで示すことができない貫禄というものだろう。

H-530

1953年頃に開発された38cmの同軸2wayユニットで、ウーファー部分のマグネットがより強力になり、高域用に大きな金属製の大きなホーンが搭載され、外付けのネットワークが付属している。これにより反応が速くレンジの広い音場再現が可能になり、音楽ジャンルを選ばずに使え、ツヤのある弦の響きや軽快なピアノのタッチも良く再現される、鳴らしやすいユニットである。市場価格35 ～ 40万円/ペア

TYPE-H

1944年頃に開発され、当社初の38cmのカーブドコーンのウーファーとドライバーの2way同軸ユニットで、その構造はTannoyにも影響を与えたようだ。ほとんどフルレンジのような鳴り方をするウーファーと高域トゥイーターのつながりがすばらしく、まるでシングルコーンで鳴っているかの様。レンジはあまり広くないが、中域音の密度が高く生々しく色気のあるボーカルが聴ける。市場価格40 ～ 45万円/ペア

P8RX

20cmのシングルコーンのフルレンジユニットで、薄くて張りのあるコーン紙と強力なマグネットで能率も高く、音の芯が太くパリっとした音が特徴。少し大きめの箱に入れて使うと、ジャンルを選ばずに使える完成度の高いユニットである。市場価格8 ～ 10万円/ペア

H-222

1951年頃に開発された30cmの同軸2wayユニットで、マグネットは38cm同軸ユニットとほぼ同じ強力なものが使われているため、より反応の速い再生音を可能にしている。
そのため、通常の30cm用の箱ではバランスを取ることが難しく、やや大きめの箱かバックロードの箱が必要となるが、非常にコンパクトなユニットながら高い潜在能力を持つユニットといえる。市場価格18 ～ 22万円/ペア

RP-103

比較的大きなアルミダイキャスト製のホーンを持つトゥイーターで、フェノリック製のダイアフラムを採用するため、能率もかなり高く、とてもクセがなく滑らかな音色で100dbを超えるユニットにも楽々とついていく。同社のほとんどの同軸ユニットの高域用に採用されていて、Jensenサウンドの色付けをする上で重要なユニットである。市場価格7 ～ 8万円/ペア

同社のトゥイーターに採用されているフェノリック製のダイアフラム

RP-102

大きなアルミダイキャスト製のホーンとフェノリック製のダイアフラムを持つトゥイーターで、RP-103をモディファイしたタイプとなる。このユニットはH-530同軸ユニットに同じものが搭載されている。市場価格9 ～ 10万円/ペア

取材協力：アトリエJe-tee　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com

Retro-Future
古くて新しい　もうひとつのビンテージオーディオ

Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第12回 **Jensen**

本誌23号でも紹介したJensen社は1929年にスピーカーの専門メーカーとしてデンマーク出身のピーター・ジェンセンによってシカゴに設立された。ドライバー、トゥイーターのダイアフラムに薄いフェノリック樹脂が使われ、ウーファーは軽く張りのあるコーン紙が使われていることで、音の特徴としては他のシステムをしのぐ反応の速い重低音再生が可能になる。Jazz、Classic、Popsとジャンルを選ばず対応できるのも魅力。同社の製品は当時、本拠地がアメリカ東海岸であったため日本にはあまり輸入されなかったようだ。

本文／**田中伊佐資**
キャプション／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）
撮影／小林幹彦（彩虹舎）

Jensen 1200XL

1965年頃に発表されたJensen社の集大成モデルで正面のデザイン違いの3種類が販売されていた。見た目はちょっと大きめの洒落たデザインのスピーカーだが、搭載ユニットは現在に至っても例を見ない38cmウーファーを1台に4機搭載した4ウェイ7ユニット構成となっている。大口径のフェノリック振動板を持つ強力なミッドレンジドライバと4発のウーファーから繰り出される低音の存在感は、他の機種からは体験できないサウンド。その奏でる音楽も分厚く締まったハイスピードな低音と、滑らかで明るく伸びやかな中高音が音楽ソースを選ばず気持ち良く鳴ってくれる。サイズは幅101cm、高さ77cm、奥57cmで質量は110kg。市場価格は320～360万円ペア

ジャズ喫茶に、というより自分が欲しい まぎれもなく過去ベスト3に入る音

気持ちよく晴れ渡った朝、高速を飛ばしてアトリエJe-teeの倉庫に向かった。第10回のトゥルーソニック編に続いて2度目の訪問となる。ここは倉庫というより趣味のいい古道具屋という気配が漂っていて、なにやらときめいてくる。店舗として商品を陳列していないから、余計にそう思う。

もうすでに本日の主役ジェンセンの1200XLがセッティングされていた。大きい。いつもの目黒の店では、こりゃ収まらない。4ウェイ7スピーカー、38cmが4発も入っていると岡田さんは説明してくれた。しかし、そのたたずまいに強烈なスペックをあえて押し殺すような節度がある。

ウィリアム・カーターのバロック・ギターが静かに流れている。フェルナンド・ソルの初期作品集だという。会話よりはるかに小さい音量だが、まったく無理なく伸びやかな音だ。懐が深い。ただものではない。こういうのをストレスのない音なんだなと思った。

50畳という広い部屋で、しかも小音量なのに楽器の骨格がわかる。左右のスピーカーは4～5m離れている。それを一辺とする正三角形のポジションに僕は座った。しみじみ吟味してみると、悠然としていながら大味ではない。細部がきちんと出てくる。仕事はおしまいにして、ゆっくり聴きたいと心から願った。

岡田さんは限界を試すかのように新しい録音のジャズ・ピアノ・トリオ（ロバート・ラカトシュ）をかけた。ガバッと音量が上がった。

ここまで器が大きいと感じさせるスピーカーはそうそうないだろう。見た目の外寸ではない。度量が大きいのだ。オーラがある音というのだろうか。一生懸命追い込んで、チューンされたシステムの音はよく聴くことがある。口惜しいけどそういった努力を軽く踏み越えた先にある威厳と貫禄が宿っている。生まれながらに備わっている格がある。

続けてともに晩年のミルト・ジャクソンとアート・ペッパー、さらにご存じコルトレーンの『バラード』。下衆っぽい話、これは銭を稼げる。顔はクラシカルだが、ジャズ喫茶に置きたい。誰かこのスピーカーを看板にして開店して欲しい。いや本当の本音としては、自分が欲しい。場所も資金もないけどねえ。なにかと妄想させてくれるスピーカーなのだ。

趣を変えてヨーヨー・マの「バッハ無伴奏チェロ組曲第1番ト長調」が始まった。天才チェリストの真髄に肉薄してくれといわんばかりに音量はかなり持ち上がっている。鬼気迫るかのように力強く鳴り響く。鬼気を発しているのはヨーヨー・マなのか、それともジェンセンなのか。よくわからないけれど、分析はどうでもいいや。どっちにも感動した。まぎれもなく本連載の過去ベスト3に入る音だった。

Jensen 1200XLのリア部。スペックも記されている

キャビネット構造は基本的には25mm厚の集積材を使った強固な密閉タイプとなっているが、下向きの2個の38cmウーファー用にスリットが斜め前に設けられている。また、ユニットの配置も音のフォーカス密度を高くするためにミッドレンジホーンを取り囲むように配置されており、正面中央にホーン開口部を縦にホーンドライバーがあり、その両脇を挟むように38cmウーファーが正面向きに2機、そのすぐ後ろに下向きに2機搭載され、ホーン開口部の上部分にトゥイーターと、スーパートゥイーターが配置 されている

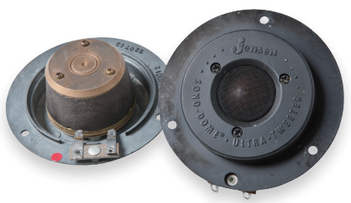
正面のデザインは3種類が存在。今回紹介するのはヨーロッパ調のデザイン

RD-500

アルミダイキャスト製の重厚なショートホーンに4インチ口径のフェノリック振動板を搭載している。このサイズのフェノリック振動板を持つシステムは他にも例が少なく、このサウンドの重要なポジションを受け持っている

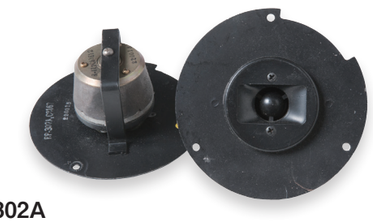
P15LF

アルニコマグネットを搭載した38cm口径のウーファーで、固く軽い紙の振動板で構成されている。能率も97dBくらいあり高能率になっている。布製のギャザードエッジが採用されているため、ハイスピードで厚みのある低音再生が可能になっている



E-100

このシステムのために新たに開発された他社では例のないフェノ リック振動板のドーム型のスーパートゥイーター。10,000Hzから上の帯域を受け持っており、滑らかでクリアな音色、かつ 38cmウーファー 4機のエネルギーに対応できる優れたスーパートゥイーターである



RP302A

PR-100 Imperialの後期型モデルにも搭載されているJensen を代表するフェノリック振動板を持つトゥイーターで、正面のホーン開口が初期モデルの丸から四角い横長に変更になり、音像のフォーカスがよりシャープになっている

取材協力：アトリエJe-tee　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com

Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げていこう。

第20回

Jensen
1935〜40年代

以前にもご紹介した事があるアメリカのパイオニア的スピーカーメーカーでありウエスタンエレクトリックにもスピーカーを供給していたことでも知られるが、このメーカーが最初にバスレフ型キャビネットを考案したことは日本ではあまり知られていない。今回はそれらが開発された1935-1940年代のオリジナルのキャビネットとその当時搭載されていたユニットを紹介しよう。

本文／**田中伊佐資**
製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）
撮影／小林幹彦（彩虹舎）

B-121に付けられたエンブレム

リア部に貼られた仕様書

B-121
Bass-reflex cabinet

1930年代後期に開発された30cmユニット用のバスレフキャビネットで、天板と底板は18mmの合板が使われ、正面から側面は4mmの正面のアールを付けた一枚板で構成されている。内部には補強用の桟が全くない。これは箱の響きを最大限引き出す構造を目指したためである。側板には現在ではほとんど使われることの無い圧縮ボードのようなものが使われていて、これを正面から側面までを1枚で仕上げる事によって響きの良い音の箱となっている、まさに楽器のような箱である。

天真爛漫なキャラのB-121 C-151は重厚感を醸し出す

ジェンセンは過去にアトリエJe-Teeで何度か聴かせてもらったが、そのたびごとにユニットだけでなくエンクロージャーも秀逸だなと思う。今回の2モデルは1930〜40年代の同社最初期モデルらしく、堂々たる大ヴィンテージ・スピーカーだった。

岡田さんから「世界で最初にバスレフ型を考え出したメーカー」と説明があった。ということは「なんでこの穴（ポート）から低音が出てくるのだ」と当時の人々は驚いたのではないか。スピーカーの裏へ回ると銘板に相当する紙が貼ってあり「Jensen Bass Reflex」と印刷されていた。社名ロゴに英字を組み込んでマークのようになっているのが、かっこいい。バスレフってバス・レフレックスだったなと急に思い出した。いまや普通名詞になったバスレフだが、革新的な自社技術をアピールするように商品名にしていた時代だった。

30年代後半に誕生したモニター調の外観のB-121は、正面から側面にかけて1枚板を湾曲させている。その厚さがわずか4㎜だという。ドアをノックするように軽く叩くとコーン、コーンときれいに響く。まるでアコースティック・ギターのボディだった。発想としては蓄音機のラッパと同じように「楽器」なのだ。

フルレンジ一発のB-121から試聴はスタート。曲はフランク・シナトラの「エンジェル・アイズ」。いかにも板が響いているなあというような固有音はなく、声がこちらにふわっと届く。開放的で空気中に発散するような音。がちがちに剛性を強化した現代スピーカーにこの音は出ない。

ただ高域はそれほど広くはない。それを織り込み済みの岡田さんは「同時代に作られているのできれいにつながります」とヘルメット型トゥイーターQ8Pをつなげた。同じく「エンジェル・アイズ」を聴く。シナトラがささっと付けていたマスクをはぎ取った。軽量振動板がもたらす快活な声。音離れがいい。その変わりぶりに唖然とする。コーン紙の素材が共通しているらしく、つながりもたいへんいい。五臓六腑に染み渡る声だった。

次に40年代初頭のC-151を聴いてみる。これは楽器というより家具だ。いかにもコンシューマー向けで、無垢のウオールナットが重厚感を醸し出している。B-121の天真爛漫なキャラに対してこちらは、もっと芯があって輪郭が締まっている。ウーファーが大きく余裕があるので、なにかしらの含みもある。これもよく鳴る。ストレスなく声は部屋に響き渡った。

それにしてもアメリカでは70年前にこれを自宅で聴いていた人がいたのだろうか。どんだけ大富豪やねん。というよりこんなスピーカーを作っていたことのほうがすごいか。

C-151 cabinet
内側の角の写真
正面の両角は裏側を手の込んだ溝を縦に掘ってアールを付けやすく加工がされていている。かなり精度の高い木工技術が使われていて、当時のアメリカの工業製品の質の高さを感じるこができる

C-151 cabinet 内部の写真
内部には響きを良くするために補強用の桟が全くない

C-151
Bass-reflex cabinet

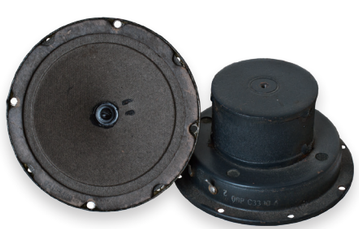
1940年代の初期に開発された家具調の38cmユニット用のバスレフキャビネットで OLD IMPERIAL と名付けられている。 天板に25mm、底板に18mmの合板が使われ、 正面から側面は7mmの1枚板で構成されている。 楽器のアコースティックギターのボディをスピーカーキャビネットの構造に取り入れたような構造になっている。 正面バッフルボードを大きめにして箱の奥行きが浅くデザインされた箱にバスレフポートを大きめに空けた構造は、より豊かでハイスピードな低音再生を可能にしている。

H-510 coaxal unit（C-151に搭載）

1940年代初期に jensen社 が開発したホーンドライバー貫通型の38cm同軸2wayユニットの第一号機。ユニット中央のホーン開口部分には金属製のディフューザーが取り付けられており、これは薄いアルミの円盤が3層に重ねて構成されているため、共鳴して高域特性を豊かにしている。ウーファーの振動板は1枚コーンのフィックスエッジとなっているため反応の速い低音再生が可能で、能率もかなり高いユニット。ネットワークはなくトゥイーターローカット用の1μのコンデンサーが搭載されている。

A-12 PM（B-121に搭載）

日本でもマニアの間では良く知られているフィールドタイプのA-12は、元々は1930年代からハモンドやワーリッツアーなどのオルガンや電蓄のフルレンジタイプのユニットとして多く使われていた。1930年代の後期になるとアルニコを使ったパーマネント型のA-12 PMが開発される。フレームと振動板はA-12とほぼ同じものが使われている。フレームの塗装はシルバーに黒いマグネットカバーとなり、またそのフレームの外側にある型番のPMはパーマネントの頭文字となる。



Q8P コーン型トゥイーター

1930年代の後期に開発されたアルニコマグネットに紙の振動板を持つ約10cm口径のトゥイーターで、これより古い時代にはフィールド型のタイプもあった。かなり薄い振動板のため情報量が多くリアリティ豊かで紙の振動板らしい刺激音が極めて少ない、とろけるような質感のサウンドが引き出される優れたユニットである。今回は右上ページに掲載のB-121 Bass-reflex cabinetと組み合わせて試聴した。

取材協力：アトリエJe-tee　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com

Retro-Future
古くて新しい　もうひとつのビンテージオーディオ

Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号はJENSENの38cmユニットA-15がテーマ。1920年代に登場したフィールド型と40年代に登場したアルニコマグネット式。同一ユニットを方式の違いで比較試聴するという前代未聞の試みをお届けしよう。

本文／田中伊佐資

製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）　撮影／小板直樹（彩虹舎）

第47回 **Jensen**

1929年頃に会社が設立した当時はまだ自社の完成したスピーカーシステムの販売はなく高品質なユニット専門の供給メーカーだった。当初からダイナミック型のスピーカーユニットを開発していた技術力は高いレベルにあり、1930年台頃からWestern Electric 社の大型シアターシステムやスタジオモニタースピーカーに搭載させるユニットを供給していた。

Jensen A-15／Field（最初期モデル）

1930年代の初め頃に開発された Jensen のフィールドコイル（電磁石）ユニットといえばA-12 が有名でハモンドオルガン等の楽器用として採用されていた。同じ頃に A-15 は当時の高級大型電蓄を生産していた RCA、Wurlizter、Operadio などの音楽再生用の広帯域38cm大口径スピーカーとして開発される。このユニットは Jensenのブランド名として単体で販売されたモデル。シルバー塗装でフィールドコイルの電圧は接続される周辺機器に合わせて2500、3800、8500Ωなど数種類ある。その後40年代頃にはアルニコマグネットに変更され、この頃開発された有名なウエスタンエレクトリック社のスタジオモニター 753C システムにWE KS-12004の型番で搭載されている。

アルニコマグネット時代のA-15

1940年代に入ると家庭での音響機器の導入も始まり、Jensen 社も画期的なバスレフタイプのスピーカーキャビネットを自社で開発。自社製のシステムを販売していく。この頃にはアルニコを使った永久マグネットを開発し、フィールド型は姿を消していく。当初は A-15ユニット1本を搭載していたが、その後レコードの再生帯域が広くなるとA-15はトゥイーターも追加したコアキシャルユニットや小型のホーンドライバーを搭載した本格的なスタジオモニターシステム（ウエスタン753システム）にも搭載される。

Jensen A-15 PM

Jensenのブランド名でユニット単体で販売されたモデル。フレームからコーン紙などのパーツやシルバー塗装もA-15 Fieild タイプと同じだが 、カバーはフィールドコイル・マグネットの時代の金属製からベークライト製になる。さらにその後はカバーは無しに省略されている

Jensen A-15 PM／KS-12004

ウエスタンエレクトリック社の753C モニタースピーカー仕様のA-15. フレームからコーン紙まで Jensen A-15PMと同じものが採用されており、外装はマグネットカバーが黒、フレームがシルバーに塗装された仕様になっている

A-15 / ST-600

当初ユニットの生産、販売のみをしていた Jense 社がバスレフキャビネットを開発して自社システムの販売を開始する。この頃の自社システムに搭載されていたモデルで A-15PM とフレームからコーン紙まで同じものが採用されていて、フレームはダークブルー塗装が採用されている

Field Coil Magnet Speaker（電磁石型スピーカー）時代のA-15

1920年代に開発されたコイルを巻いたマグネット部分に電圧をかけて電磁石を形成するスピーカーユニットである。アルニコなどの永久磁石は形成後には磁力の低下があるが、このフィールドコイル型は電源投入後は100%の磁力が持続される。ラジオに搭載させる小型のフルレンジタイプから大型シアター用の46cm口径 のウーファー専用タイプまであった。当時はまだ生産量も少なく、製造年代や用途によってフィールドコイルの電圧や採用されるコーン紙のバリエーションが数種類存在する事もあり、ユニットの機種によっては2個が揃ったペアを確保しにくい年代のユニットである。

Jensen A-15／RCAモデル

RCA の大型電蓄用モデルでJensen A-15 と全く同じフレーム、コーン紙が採用されているが、フィールドコイル電圧が RCAの電蓄に搭載アンプに合わせて 3200Ωに設定されている。そのため、他社用ユニット見分けしやすいようにユニットフレーム全体が赤く塗装されている

Jensen A-15 / Field（後期型）

RCAのようなフィールドコイルの電圧指定がない他社の大型電蓄には、フレームが一般的な Jensen のダークブルー塗装でフィールドコイル電圧 8500Ωのタイプを搭載。こちらの電圧に合わせたアンプがそれぞれ搭載されていた

A-15 / RCA モデルの Field Coil Magnet のコイル部分の写真

100年前のフィールド型をアルニコ式と比較試聴した

自宅ではヴィンテージ・スピーカー一発のモノラル・システムを寵愛しているので、フィールド（励磁）型スピーカーに興味がないこともない。

しかし一般的な永久磁石式とは異なり、フィールド型はユニットとは別に電源部も必要だ。このことがかなり厄介に感じ、なるべく考えないようにしてきた。

だから岡田さんが「今日はフィールド型です。モノラルで聴いてみましょう」と話があったとき、まずはその電源がどういうものかすごく気になった。

早速見せてもらったものはアトリエJe-Teeのオリジナル製品で、僕がイメージする御大層なものではない。「まずはやってみることが大事なのでね」と言われ、まさにその通りと合点がいった。

ユニットはジェンセンのA-15という。およそ100年前、1920年代に開発されたらしい。アルニコを使った後年の同モデルも聴き比べもできるようになっていた。

まずはビリー・ホリデイの『ボディ・アンド・ソウル』をフィールドで聴いてみる。レトロとかノスタルジックとかの形容はまったく当てはまらない。張りがあって、みずみずしい歌声。全部が冴えている。

アルニコに切り替えると、もちろんこれも悪いわけがない。だがフィールドで聴き取れた微妙な艶みたいな部分が減退している。これだけ単独で聴けばわからないレベルなのだが。

ここで岡田さんがフィールド電源の電源ケーブルを変えてみましょうと興味深い提案があった。これがかなり変わるらしいのだ。

たったいま使っていたのは、ヴィンテージの撚り線が導線。これをウエスタンの単線に変えてみる。

ミッドレンジがドンと張り出して声がたくましい。温度感がぐっと高くなった。考えてみれば「スピーカーの電源ケーブルを変える」というのは初めての体験だ。ヴィンテージの真空管アンプよりも明らかに変化の具合が激しい。

さてどっちがいいのか？ もう一度撚り線にもどすと。色合いが違うだけで甲乙付け難い。明るく開放的な撚り線、リッチな単線といったところか。

ジェンセンのトゥイーター98-Pをここで追加してみる。ビリー・ホリデイを聴いて、取り立てて高域の不足感はなかったが、ダイアナ・クラールをかけてみると、こういった新しい音源ではステージの広がりが出る。

最後は一青窈の「ハナミズキ」。やっぱり人の声は圧倒的にいい。いかにも音の粒子が細かいという感じで、歌い手の個性、微妙な表現がリアルに伝わる。

歌詞のなかで「百年続きますように～」と繰り返されるが、これにはドキンとした。このスピーカー、本当におよそ100年続いたわけなので。